



## 趣旨

「職員が十分に対応できない」などの理由から、医療の必要度が高い要介護者は、通所介護（デイサービス）の利用ができない現状があります。

在宅でひとりで介護を担っている家族からは「腰痛で悩んでいるが、自分が病院に行く時間がない」といった声がしばしば聞かれます。

こうした一例からも医療の必要度が高い要介護者をケアする家族ほど、時間と労力を費やすことを強いられている一面があることは否めません。

一方、ある家族からは「退院の5分前にたんの吸引の方法を病院から教わった」との声も聞かれ、病院から在宅に戻る際の看護指導をはじめ、地域の病院と診療所の連携における課題もあげられます。

療養病床の再編が本格化し、地域ケア体制の整備が進められるなか、医療と介護が両輪となり、医療の必要度が高い要介護者とその家族が24時間365日、地域で安心して生活するためには――。パネルディスカッションでは、立場の異なる医療提供者にご参加いただき、その課題解決に向けた取り組みについて考えます。

近い将来、自分の身近で起きるかもしれない問題として、この機会に、ひとりでも多くの方が在宅医療、在宅介護の問題にご関心を抱いて頂けるようお願いしております。

全国在宅医療・在宅介護家族の会 代表 小山朝子

## 【プログラム】

14:00~14:10 **ドキュメンタリービデオ「笑顔がみたくて」放映**（制作：NPO法人 PEGドクターズネットワーク）

14:10~14:30 **課題提起「要介護5の祖母と過ごした9年間」**

小山朝子（ジャーナリスト）

医療・介護ニーズが高い在宅療養者をケアする家族の実情について、自らの経験をふまえて報告します。

14:30~16:30 **パネルディスカッション**

### ■ 医療依存度が高い在宅療養者が利用できるデイサービスの実践

坂本由恵（医療法人社団 三医会 訪問看護ステーション長／看護師・ケアマネジャー）

人工呼吸器が必要な要介護者などを受け入れるデイサービスの運営に関わるお立場から、その成果と利用者の声、さらに「呼吸療法認定士」の資格を取得し利用者宅で排痰ケアを行うなど、専門性をいかして訪問介護のサービスを行うことの重要性を伺います。

### ■ 胃ろう造設者をささえるネットワーク構築の取り組み

大津陽子（財団法人 東京都保健医療公社 多摩南部地域病院／地域医療連携室 看護相談係長／看護師）

地域医療支援病院として、多摩地区の病院間で胃ろう造設者や家族を支援するネットワークづくりの取り組みと地域医療連携室看護相談係のお立場から、がん患者をはじめとする退院調整の現状と課題についてお話頂きます。

### ■ 在宅支援のための「たんの吸引」

大坪公子（特定医療法人 大坪会 三軒茶屋病院院長／社団法人 日本女医会 理事／医師）

社団法人日本女医会では、平成18年より、在宅で介護を行う家族や医療関係者、ヘルパーらに向け、「たんの吸引」を安全に行なうための講習会を各地で実施しています。在宅療養者のたんの吸引に関わる問題と課題、さらに講習会の参加者の声などをお話頂きます。

16:30~16:40 **アンケート実施・回収**

進行 寺橋真由美（高齢者アクティビティ開発センター）

## 市民講座「介護をささえる、家族をささえる」参加申し込み用紙

フリガナ 氏名	職業
	所属
住所 〒	—
電話番号	

市民講座

介護を支える、家族を支える ―医療・介護ニーズが高い在宅療養者と家族への支援―  
完了報告書

ジャーナリスト

小山朝子

○ドキュメンタリーの放映で「在宅医療の今」を知る機会に

3月1日、大田区産業プラザで行った市民講座「介護を支える、家族を支える ―医療・介護ニーズが高い在宅療養者と家族への支援―」では、在宅療養者とその家族が抱える問題を提起し、医師、看護師ら医療提供者とともに考える試みを行った。看護師、ヘルパー、学生、在宅医療・介護に関心をもつ約50名の参加があった。

拙者は現在おもに高齢者の医療・介護をテーマとするジャーナリストとして、執筆や全国で講演を行い、テレビ・ラジオ等でコメンテーターをつとめているが、その一方、私生活では、約9年にわたって在宅医療・介護を担ってきた。ケアをしていたのは自力では動くことができない祖母で、祖母は気管切開、胃ろう、在宅中心静脈栄養法などの医療処置が必要であった。

祖母との生活を振り返り、高齢者の医療、介護の現状について多くのことを学んだと同時に、医療の必要性が高い要介護者とその家族が在宅で生活するうえでの課題を感じた。

講座では、まず在宅医療が必要な家族の現状を知っていただくため、我が家の在宅介護の日常を綴ったドキュメンタリービデオ「笑顔が見たくて」（制作：NPO法人 PEG ドクターズネットワーク）を放映。その後、ジャーナリスト、在宅医療を担う家族の立場からの課題提起を行い、以下のような問題点を挙げた。

現在、医療の必要性が高い在宅療養者の体調が急変したときなどは救急車に頼らざるをえない現状がある。また、胃から直接栄養を摂取することが胃ろうのカテーテルが破損した場合など、今命に関わる状態でなくとも緊急に処置が必要である。こうしたときに地域の診療所などが連携をはかることで在宅療養者が救急車だけに頼らないシステムを構築することもできるだろう。

さらに、座位を保持することも難しい患者の場合、病院の行き来にも寝台（ストレッチャー）付の車両でないと移動できない。しかし、民間の移送サービスは高額で、同じ距離でも一般のタクシーの料金と比較すると10倍以上に設定されている現状がある。こうした問題は、医療・介護関係者のみならず、社会全体で考える必要があるといえよう。

加えて、入院中であれば病院から支給される医療材料が、在宅医療の現場では、医療材料の購入が患者負担となっている現状がある。医療保険制度において在宅における療養を行う患者については、多くの場合において「在宅療養指導管理料」に分類される保険点数が請求される。それらの患者への医療材料等の供給については、在宅療養指導管理料を請求する医師が医療行為に必要なかつ十分な医療材料を提供することが求められている。しかし、この在宅療養指導管理料の範囲で支給すべき医療材料がどこまでなのか、具体的にどこまで支給すれば十分な量といえるのかは、各医療者の判断に委ねられている。核となる医療材料だけは提供するが、それ以外のガーゼや脱脂綿、綿棒などについては支給を行っていないという医師も少なくない。少数の患者のために常に在庫を抱えることが困難なこともその理由として考えられる。

今後高齢化が進むなかで、介護保険制度を利用する医療の必要性が高い在宅療養者における医療材料等の供給についても検討されてしかるべき課題となるのではないか。

在宅医療を担う医師の問題もある。現在、在宅で口腔ケアなどの指導を行う歯科医師や褥瘡などがある在宅療養者に往診を行う皮膚科医はいるが、機器が必要ということはあるにせよ、眼科や耳鼻科といった専門の医師も、積極的に地域や在宅の現場に足を運んでほしいと感じる。

#### ○在宅療養者と家族の視点から

一方、気管切開をしており、たんの吸引をする必要性があるなど、医療の必要性が高い在宅療養者を抱える家族ほど休息ができず、「自由な外出がままならず、自分が病院に行きたくても我慢している」との声もあがっている。

家族の休息が目的のひとつである通所介護（デイサービス）の利用においても、医療の必要性が高い要介護者は「職員が十分に対応できない」といった理由から利用できないのが実情である。

平成17年3月、厚生労働省が「在宅におけるALS以外の療養患者・障害者に対するたんの取り扱いについて」という通知を出し、一定の条件下における家族以外のたんの吸引の実施を許容するとしている。しかし、現状ではヘルパーによるサービスを提供する訪問介護事業所においてたんの吸引は行わず、ヘルパーに対する指導、研修なども行っていない事業所は少なくない。

そのほか、看護師が訪問する訪問看護のサービスにおいても介護保険下ではケアプラン（介護サービス計画）に基づき、何曜日の何時から何時までというようにあらかじめ決められた範囲での利用が一般的で、柔軟に利用できるシステムにはなっていない。

取材を行った在宅療養者の家族からは「退院する5分前にたんの吸引の方法を教わった」との声も聞かれ、病院から在宅に戻る際、医療や家族の知識やスキルを十分に教わらない

ままに退院へ戻り、不安を抱えたまま、在宅ケアを行っている家族も少なくない。地域の医療機関と在宅医療の連携が十分に行えていない現状もある。

#### ○患者の声に耳を傾けた実践

講座の後半では、上記のような課題に取り組む医療提供者3名による講演を行った。

医療法人社団三医会 訪問看護ステーション長で、看護師・ケアマネジャーである坂本由恵さんからは、＜医療依存度が高い在宅療養者が利用できるデイサービスの実践＞をテーマに、人工呼吸器の装着が必要な要介護者などを受け入れるデイサービスの運営に関わるお立場から、その成果と利用者の声、実践における課題、さらに「呼吸療法士認定士」の資格を取得し 利用者宅で排痰ケアを行うなど、専門性をいかして 訪問看護のサービスを提供することの重要性を伺った。

次いで、財団法人 東京都保険医療公社 多摩南部地域病院 地域医療連携室 看護相談係長で看護師の天津陽子さんからは、＜胃ろう造設者をささえるネットワーク構築の取り組み＞をテーマに、地域医療支援病院として、多摩地区の病院間で胃ろう造設者や家族を支援するネットワークづくりの取り組みと地域医療連携室看護相談係のお立場から、がん患者をはじめとする退院調整の現状と課題についてお話頂いた。

3番目のゲストスピーカーである特定医療法人大坪会 三軒茶屋病院院長、社団法人 日本女医会 理事で医師の大坪公子さんからは＜在宅支援のための「たんの吸引」＞をテーマにお話を伺った。

社団法人日本女医会では、平成18年より、在宅で介護を行う家族や医療関係者、ヘルパーらに向け、「たんの吸引」を安全に行なうための講習会を各地で実施している。在宅療養者のたんの吸引に関わる問題と課題、さらに講習会の参加者の声などをお話頂き、参加者の皆様にも模型をつかったたんの吸引の方法などをご覧頂き、その知識を深めてもらった。

各3名の講演終了時には、各講演にまつわる患者からの意見を一言申し添えるかたちでプログラムを構成した。

各スピーカーの講演後、参加者からは「経鼻経管栄養から胃ろうへ移行するにあたって不安がある」、「気管切開の方法を学びたい」といった質問や意見があった。

各ゲストスピーカーには、講演前に職場に伺い、事前に内容の打ち合わせをさせていただいたことで、講座開催にあたっての意識の共有化をはかることができた。

#### ○マスコミ各社からのPR協力

今回の市民講座のスピーカーにあたっては「患者の声に耳を傾けた具体的な実践活動を行っているか」を基準に、事前リサーチを行うなどしたうえで選定したため、その選考に時間を要したことから、チラシ等の作成など宣伝活動にも遅れが生じたことが反省点として挙げられる。

しかし、短期間ながら、本講座のPR活動を積極的に展開した成果により、「読売新聞」をはじめ、介護情報誌などで紹介され、貴財団の活動を広めるという意味においては、微力ながら貢献できたのではないかと感じている。

ちなみに、拙者が連載している福祉、介護の総合サイト「ふくしチャンネル」でも、本講座のレポートを連載しているので、ご覧いただき、ご批判等頂ければ幸いです。

(<http://www.fukushi.com/topics/koyama/>)

※同封の掲載記事を参照

また、講座開催をPRするなかで、出版各社から「自社の刊行物の宣伝をしてほしい」との依頼があり、参加者には各社からのチラシも市民講座のプログラム、アンケートなどとあわせて配布した。在宅医療・介護について情報を提供したいという側と、情報がほしいという側の接点となりえる、このたびの講座のような機会の必要性を強く実感した。

講座開催にあたっては各スピーカーの関係機関やNPO法人、スタッフとして参加していただいた有志の皆様力がなければ遂行することは不可能であったろう。ご尽力、ご支援をいただいた関係者に感謝したい。

#### ○患者・家族の声を反映するための「実践」

実際に在宅で医療・介護を担うご家族はこのような場に参加することが難しい状況もあり、同講座に参加されたご家族もヘルパーに留守を依頼されてのご参加であった。

問題を提起したくても、あるいは情報を収集したくても、在宅療養者は、そもそも「外出できない現実」を私たちはまず知る必要がある。

上記に掲げた在宅医療に関する諸問題は、「当事者として経験しないとわからない」ことでもあり、個人的にはジャーナリストとしてこうした問題を提起していく使命があると思っている。

同講座では一般の市民が「在宅医療に関して関心をもつきっかけとなった」との声もあった。このような講座の参加者はその内容から医療、介護関係者が中心となるものが多いが、一般の方に対して、在宅医療に関するわかりやすい情報提供を行っていくことも必要

だと感じた。

在宅療養者の家族である当事者として、24 時間 3 6 5 日安心して在宅で生活できる地域づくりの課題を実感し、患者や家族自らが声をあげることの必要性を認識し、そのための実践活動として「全国在宅医療・在宅介護家族の会」を設立した。

同会では このたび行った市民講座のようなさまざまな人が同じ場所に集まり、在宅医療・在宅介護について考える場をつくりたい。

さらに、在宅療養者とその家族に関する調査・研究、情報の提供をはじめ、患者・患者家族の視点からの政策提言なども積極的に行い、誰もが安心して自宅で生活できる地域づくり、国づくりに貢献しく活動を地道に継続していきたいと考えている。

私事になるが、約 9 年にわたってケアを続けてきた最愛の祖母は、昨年 11 月 20 日に急逝した。現在はまだ深い悲しみのうちにあるが、これまでは祖母のために注いだ力を、今後は多くの在宅療養者や家族のために注ぎたい。

最後に、貴財団からのお力添えがなければ、本講座を開催することはできなかった。心よりお礼申し上げたい。

在宅療養者ならびに家族、誰もが住み慣れた自宅で安心して生活できるために、率直なご助言と一層のご支援を賜れば誠に幸いである。